

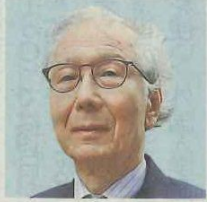
# 大型評論

大昔から感染症の世界的大流行（パンデミック）は感染者と未感染者の間を分断してきた。社会は感染者に烙印（らくいん）（ステイグマ）を負わせ、汚名を着せて、彼や彼女たちが罰を受けるに至った由縁を暴き立て「罪びと」として排除した。不安定で情緒的な思考が拡散すると、社会の中に潜んでいた偏見や差別が顕在化してくる。

## ▼「非国民」の再来

今回のコロナウイルス感染症の場合で言えば「3密」を旨としてライブハウスに行った若者が悪い」「こんな時に危険な外国旅行に出かけた者は罰当たりだ」という言葉や、「医療の専門家なのにウイルス感染したのは不注意のせいだ」といった理不尽な差別だ。外国人へのステレオタイプな偏見、自己中心的な思いに由来する他者への憎悪、偏狭な攻撃性なども顕著になる。差別する側は、排除の心理を無理に理屈立て、被害

広瀬 弘忠氏 災害リスク学者



ひろせ ひろただ 1942年東京生まれ。東京女子大名誉教授。東京大文学部卒。同新聞研究所助手。東京女子大助教授を経て同大学教授。日本リスク研究学会会長などを歴任。2011年定年退職して現職。専門は災害・リスク心理学。文学博士。著書に「災害防衛論」「人はなぜ逃げおくれるのかー災害の心理学」など。

者の「過失」に帰属させて合理化しようとする。そこには一片の同情も、共感も、感謝も、寄り添う気持ちもない。心が「恐怖ウイルス」に感染している。

恐怖は理性を奪い、感染を恐れる人は、短絡的で根拠のない天譴（てんけん）論（天が罪びとに罰を与えろという論）に同調する。差別する側も、いついかなるときに「天罰」が下るかと拡散し、告発しようとする。

## 理性奪うコロナ感染恐怖

# 烙印と差別 深刻化懸念

分らないのに。人々は寛容さを失い、あたかも正義を執り行っているかのよう錯覚し、国の自粛要請から少しでも逸脱すれば誹謗（ひぼう）中傷したり、他県ナンバーの車の入境を阻止したりする。

そこには「あの人は感染している」ということ以外に、私を感染させる「ウイルスを持つ人」、あるいはその人を「コロナウイルスそのもの」だとする敵意が込められている。危害の原因であるウイルスと被害者との同一化が起こる。

この窮地を脱するには第一に、過去を振り返って誤りを正すことだ。政府は、クルーズ船ダイヤモンド・プリンセスの検査、中国の武漢、湖北省などからの入国者に対する水際作戦、感染者クラスターの追及に血道を上げる余り、現実化していた市中感染を捉えきれなかった。

「自粛警察」の登場だ。要請を守らない者が「非国民」なら、自警団や隣組など戦時中の悪夢の再来である。私たちは監視社会の中で生きている。国はもうろん巨大IT企業も、私たちの一挙手一投足を監視している。その私たちの中に、心得違いの正義感から、自らが監視役になる者が現れ、感染者の情報をSNSなどで拡散し、告発しようとする。

なんとも息苦しいディスプレイアが出現しつつある。感染症流行の真つただ中では、人は互いに孤立する。例えば感染者を「あの関係などがさらされる。中世の魔女狩り並みだ。私が心を痛めたのは、この感染症で母親を亡くした女性のフェイク（偽）情報がSNSで拡散したと知ったときだ。このたぐいの人権とプライバシーの侵害は悪質で、許容できない。

が特異なのは、感染症対策の意思決定者が不在だということだ。司令塔が弱いのではなく、「ない」のである。政府、専門家会議、官僚というプレーヤーはいる。だが、政府は専門家会議にもたれかかって説明責任を果たさない。専門家会議はそんな政府に付度（そんたく）し、官僚は硬直して意見を持たない。これでは対策は早晚破綻する。終息まで年単位でかかるなら、機に依りてブレーキとアクセルを踏み換えなければならぬが、現政権は踏み違いをおかす危険が大きい。隠喩としての「影」におびえる人々はますます不安になり、集団ヒステリー、マスパニックが起こりかねない。

## ▼司令塔の不在

差別は、人権が守られないところから生まれる。今般の新型コロナウィルスの感染者は、どこまでも支援が必要な、災害の被害者だ。流行を抑えるのはワクチンだけではない。感染者の社会的生命が奪われることがなく、差別やステイグマをなくすことができれば、隠れた感染者による感染拡大を最小化できる。今こそ事実の根拠を直視する必要がある。いかなる場合においても「知は力」だからだ。